

【今月のコトバ】

GOOD ENOUGH

できる限り「平等で持続可能な社会」を目指すために、欧米ではグッドイナフ(必要十分)の概念が提唱され始めている。「足るを知る」グッドイナフな社会が実現することで起こり得る個人的・社会的メリットとは？

必要十分を最初に唱えたのは、英国の精神分析医ドナルド・ウィニコット博士だ。1953年に彼が打ち出した「必要十分な母親(グッド・イナフ・マザー)」の概念が、今、再注目され、関連育児書が英米で相次いでベストセラーとなっている。博士は、子どもが体験する状況は「失敗を受け入れ、フラストレーションに対応できる力を育むためにも、必要十分であるべきで、完璧でなくてよい」と述べた。心理療法士のフィリップ・ペリーは、「子育ては完璧な人間を作り出すプロジェクトではない」とし、親自身が不完全であることを認めて子どもと向き合い、信頼関係を築くことを勧める。

個人と社会のあり方としての「必要十分」を、心理、政治、経済、社会など学際的に論じた研究書が『必要十分な人生(ザ・グッド・イナフ・ライフ)』だ。著者

アヴラム・アルパートは、人々が過度な競争をやめて必要十分を目指すことが、個人が抱える悩み、社会の貧困や不平等、環境に至るまで、幅広い問題の解決につながると主張する。「衣食住と医療など基本的なニーズが満たされ、自由な時間や幸福感が増し、創造性を発揮できる、それが必要十分な人生です。誰もが必要十分に生きられる社会は、今よりも平等で持続可能なものになるでしょう」

かつてベストセラーになった『LIFE SHIFT(ライフ・シフト)―100年時代の人生戦略』は、健康や家族・友人との人間関係といった「無形資産」が幸福感をもたらし、よりよい人生につながると主張した。必要十分な人生は、これらの無形資産を高められる持続可能な生き方でもある。

公平な社会を求める議論はメリトクラシー批判にもつながる。た

だし、成功者が自らの恵まれた境遇を認めて謙虚になるだけでは不十分だとアルパートは考え、そもそも成功の定義を「すべての人が尊敬を持って生きられる世界の実現に貢献すること」に変えるべきだと主張する。「勝者も幸せとは限らない。人生の意義は、他人を負かすことではなく、ともに働くことから生まれるのですから」。実際、心理学の複数の研究で、他者に勝って成功を取めた人は、むしろ幸福度が低い傾向にあることも指摘されている。

資本主義社会において、必要十分な生き方を貫くことは可能なのか。「非倫理的な生き方を奨励する世界にあって倫理的な生き方を実践するのは、歴史的にも常に困難でした。だからこそ、謙虚さや思いやりを発揮できる世界を実現する必要があります。完全な平等はあり得ないからこそ、不正義を見過ごすことは許されません。すべての人が誠意を持って公平な社会を作り出そうと努力しない限り、今後も不平等は広がる一方でしょう」とアルパートは主張する。

「地球全体の幸福は、私たちが必要十分でいられるかどうかにかかっています。一部の人が自分の取り分を多くすることをやめれば、人類全員が必要十分なものを入手できるのです」。CO₂排出許容量や資源を奪い合う競争原理を維持する限り、地球の危機は脱せない。気候変動により人新世に突入した今、必要十分な生き方は、唯一の選択肢と言えるのかもしれない。

WORLD TOPICS

超競争主義が生む、不平等な社会は経済成長を阻むのか。

米国のGDP成長率は1990～2020年で1.1%。1980年代以降、富裕層の税率が引き下げられて貧富の差が広がった結果、経済成長が鈍化したとされる。バイデン政権の経済アドバイザーを務めるヘザー・パウシーは、不平等な社会では多くの人が才能や能力を生かす努力を放棄することが原因の一つだと分析する。GDPでは精神的な豊かさは測れないものの、不平等が物質的な繁栄をも阻むことの証左として注目に値する。



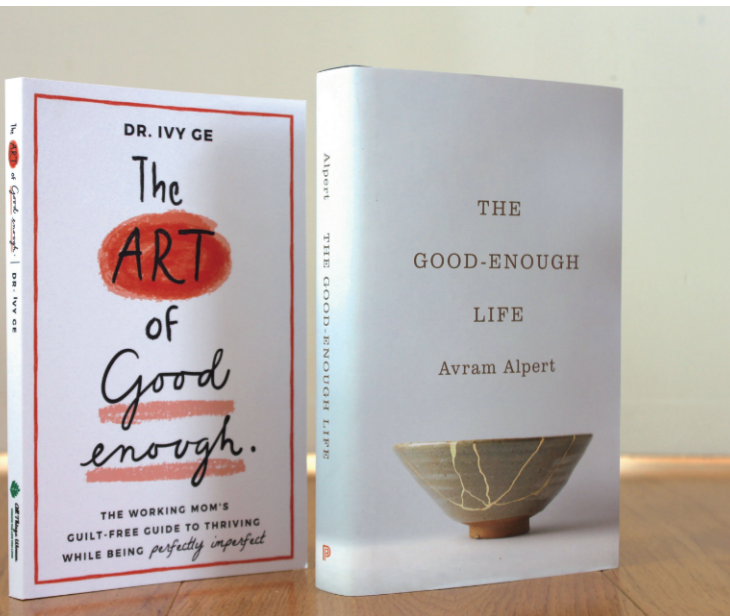
不完全な美を楽しむ「金継ぎ」が欧米で人気に。

日本で生まれたアップサイクルな文化「金継ぎ」が、今、欧米で注目されている。英国では初心者も気軽に真似できる簡易版KINTSUGIキットも販売されている。布製品の修復技術であるかけぎやダーニングと同様、環境問題への危機感から壊れた物を蘇らせて大切に使う伝統文化としてだけではなく、「不完全であることは、見方によって個性や美になる」という気づきをもたらすアートとしても注目される。



アメリカでも啓蒙され始めた「引き算子育て」の重要性。

アメリカでは、与えすぎ、詰め込みすぎの子育てへのカウンターとして、ミニマリスト・ペアレンティングを推奨するエキスパートや書籍が話題に。自身も6月13日付のワシントン・ポスト紙で、引き算の子育てを実践中で、ビジネスにおける引き算の効用に関する著書を持つバージニア大学のライディ・クロッツ教授は、「常に自分にはやらない、引く、という選択肢があることを意識することから始めるべき」と説く。



京都、龍安寺のつくばいに刻まれた「吾唯足知(われただたるをしる)」や、Less is Moreの考え方にもつながる「グッドイナフ(必要十分)」の概念を提唱する書籍が、欧米で今、注目されている。